



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 64

Feb. 2017

目 次

新会長あいさつ	2
新評議員あいさつ	2
役員等一覧	3
Benito C. Tan 氏ご逝去のお知らせ	4
諸報告	
2017 年度第 16 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）	
受賞者の決定	4
2017 年度第 11 回日本植物分類学会論文賞の決定	6
2016 年度第 1 回メール評議員会議事抄録	6
2017 年度第 1 回メール評議員会議事抄録	7
国際植物分類学シンポジウム	
"East Asian Plant Diversity and Conservation 2016" の報告	8
国際植物分類学シンポジウムの参加を通じて	10
2016 年度日本植物分類学会講演会の報告	11
2016 年度日本植物分類学会講演会に参加して	12
お知らせ	
2017 年度第 16 回日本植物分類学会賞受賞記念講演および大会公開	
シンポジウム「春が来た！野山の草のサイエンス」のご案内	14
評議員会開催のお知らせ	15
2017 年度総会のお知らせと審議事項	15
会費の値上げについて	21
インターネットによる学会誌の閲覧について	21
書評	21
会員消息	23

新会長あいさつ

会長 伊藤 元己 (東京大学大学院総合文化研究科)

昨年8月に前庶務幹事の志賀さんより、会長に選出されたという連絡をいただきました。定年まで片手の指で足りる年になり、「好きなことをして生きていこう」と思い(あくまでも研究上ですよ!), 数年前から余分な仕事は引き受けずに可能な限り自分の足でフィールド調査に出るよう心がけていたところです。しかも、皆さんご存知のように、下記のように学会として取り組まなければならないことが多数ある時期なので、会長として舵取りをするのは大変です。しかし、旧植物分類学会と植物分類地理学会の統合、新植物分類学会の設立時から、歴代の学会執行部の多くの方にお世話になったことを思うとお断りはできず、会長をお引き受けした次第です。

学会の前執行部から引き継いだ課題は山積んでいます。昨年度の総会で池田啓会計幹事から報告があったように、会計シミュレーションの結果、会費の値上げをしないと数年後に財政危機になることが明らかになっています。これはさまざまな経費のコスト上昇のため、単年度会計が大幅な赤字となっているのが原因で、旧植物地理分類学会から引き継いだ資産は底をつきそうになっています。このような状況のため、本年3月の総会では、会費の値上げ提案をさせていただき予定となっています。この問題への対処のために池田さんには無理を言ってもう1期会計幹事をお願いしました。新たな前提条件での会計シミュレーションをしていただき、新会費案の参考にさせていただいています。もちろん、学会の財政問題は単に会費を値上げすれば解決することではなく、学会としての活動の低下にならないように配慮しながら無駄のないように支出を精査して節約できるところは節約していくつもりです。

もう1つの大きな課題は植物分類学の普及活動です。昨年から絶滅危惧植物専門第一委員会では、環境省の絶滅危惧種調査の次回調査体制の構築が進められていますが、各県の取りまとめ責任者の決定には時間がかかりました。その理由は、これまでお世話になってきた方々の中で高齢のため次回の調査の責任者をお引き受けしていただけない事例が何件もあったためです。各地域で活躍されている植物研究者の方々の高齢化と若い後継者の加入が少ない問題は、絶滅危惧種の調査のみならず、多くのアマチュア研究者に支えられてきた本学会にとっても大きな問題です。幸い、前会長の角野さんは危機感をもってこの問題に対処するため、「植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会」を立ち上げられ、先日、全国の植物分類学に関連する団体にアンケート調査を行いました。結果集計はこれから発表して頂きますが、この委員会は今年度以降も引き続き活動を行うように角野委員長にお願いをしてあり、学会としての取り組みを強化していきます。

上記以外にも、若手研究者問題など、対応すべき問題は無数にあります。新たな執行役員の方々と少しでも良い方向を目指して努力をしていきますので、会員各位におかれましてはご協力をお願い致します。

新評議員あいさつ

評議員 海老原 淳

2017～2018年度は、岡崎 純子・黒沢 高秀・志賀 隆・副島 顕子・土金 勇樹・坪田 博美・西田 佐知子・藤井 伸二・布施 静香・村上 哲明・米倉 浩司・海老原 淳の12名が評議員を務めます。どうぞよろしくお願ひします。

現在の体制の学会設立から16年が過ぎましたが、口頭発表が時間内に収まらないほど盛況な大会が続き、盛り沢山の内容の英文誌・和文誌が定期刊行されている現状は、一見すると順風満帆です。しかし今期は、これまで先延ばししてきた深刻な問題のいくつかに、いよいよ真剣に取り組まなければならない状況となっています。会費値上げは、会員としても執行部としてもできることならば避けたいという思いは共通でしょうが、ついに避けることはできない状況になってしまったようです。値上げを契機に退会する会員が一人でも少なくなるように、かつ学会がこの先も安定運営されるように、評議員会でも慎重な

議論を行っていきたいと思います。本学会の活動、特に絶滅危惧植物委員会の現地調査を支えてくださっている各都道府県の研究会・同好会等の会員の高齢化も深刻な問題で、学会としてどんなサポートができるのか早急に検討が求められています。他に、ABS 問題についても今期中には大きな動きがありそうです。山積する課題への対応に、会員の皆様の声を反映できるよう努力してまいります。

役員等一覧 (任期：2017 年 1 月 1 日～2018 年 12 月 31 日)

庶務幹事 田中 伸幸

今期の役員および各委員会委員長等が以下のように決まりましたので報告いたします。

会長：伊藤 元己

庶務幹事*：田中 伸幸

会計幹事*：池田 啓

図書幹事*：高野 温子

ニュースレター担当幹事*：堤 千絵

ホームページ担当幹事*：矢野 興一

編集委員長：田村 実

和文誌編集委員長：東 浩司

英文誌編集担当委員：田村 実

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員：黒沢 高秀

自然史学会連合担当委員：朝川 毅守

講演会担当委員：布施 静香

野外研修会担当委員：西野 貴子

学術会議若手アカデミー担当委員：奥山 雄大

* 会則第 11 条で定める幹事 (連続二期まで)

評議員：海老原 淳，岡崎 純子，黒沢 高秀，志賀 隆，副島 顕子，土金 勇樹，坪田 博美，西田 佐知子，藤井 伸二，布施 静香，村上 哲明，米倉 浩司

監事：五百川 裕，西田 佐知子 (今年度の総会まで)

委員会：

編集委員会：田村 実 (編集委員長)，東 浩司 (和文誌編集委員長)，池田 博，海老原 淳，大村 嘉人，川窪 伸光，黒沢 高秀，高橋 英樹，高宮 正之，坪田 博美，内貴 章世，仲田 崇志，永益 英敏，西田 佐知子，西田 治文，藤井 伸二，布施 静香，牧 雅之，村上 哲明，山田 敏弘，米倉 浩司，綿野 泰行，David E. Boufford, Jae-Hong Pak, Ching-I Peng

絶滅危惧植物専門第一委員会：藤井 伸二 (委員長)，海老原 淳，勝山 輝男，加藤 英寿，角野 康郎，川窪 伸光，黒沢 高秀，志賀 隆，芹沢 俊介，高橋 英樹，高宮 正之，藤田 卓，矢原 徹一，横田 昌嗣，米倉 浩司

絶滅危惧植物専門第二委員会：樋口 正信 (委員長)，有川 智己，井上 正鉄，大村 嘉人，糟谷 大河，柏谷 博之，神谷 充伸，菊池 則雄，北山 太樹，坂山 英俊，田中 次郎，寺田 竜太，長谷川 二郎，服部 力，吹春 俊光，古木 達郎，保坂 健太郎，細矢 剛，宮脇 博己，山口 富美夫，吉田 孝造

植物データベース専門委員会：伊藤 元己 (委員長)，海老原 淳，梶田 忠，永益 英敏，藤井 伸二，三島 美佐子，山口 富美夫

学会賞選考委員会：永益 英敏 (委員長)

大会発表賞選考委員会：海老原 淳 (委員長)

ABS 問題対応委員会：村上 哲明（委員長）

植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会：角野 康郎（委員長），持田 誠（浦幌町立博物館），鈴木 まほろ（岩手県立博物館），黒沢 高秀（福島大学），志賀 隆（新潟大学），海老原 淳（国立科学博物館），池田 博（東京大学），藤井 伸二（人間環境大学），瀬戸口 浩彰（京都大学），東 浩司（京都大学），佐久間 大輔（大阪市立自然史博物館），高野 温子（兵庫県立人と自然の博物館），狩山 俊悟（倉敷市立自然史博物館），藤川 和美（高知県立牧野植物園），上赤 博文（佐賀自然史研究会），高宮 正之（熊本大学）

国際命名規約邦訳委員会：永益 英敏（委員長）

Benito C. Tan 氏 逝去のお知らせ

秋山 弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

日本植物分類学会の編集委員として長く貢献いただいた Benito C. Tan 博士（1946 年 8 月 30 日生まれ）は、この夏以来脳腫瘍の治療をされていましたが、残念ながら 2016 年 12 月 23 日に 70 年の生涯を閉じられました。

彼の専門は蘚類の分類学で、主に東南アジア・東アジア地域のハシボソゴケ科を中心として分類学的研究を行い、200 を超える論文を出版されました。ハーバード大学 Farlow Herbarium に勤められた後、長くシンガポール国立大学で数多くの大学院生を指導されました。その後シンガポール植物園を経て近年は the University and Jepson Herbaria (UC Berkeley) 研究員ならびに California Academy of Sciences フェローとして研究を続けられていました。国際蘚苔類学会が授与するリチャード・スプルーース賞 の受賞者でもあります。

日本人の友人も多く、当学会の会員にも彼の親切さ、なにより屈託のない笑顔と笑い声をなつかしく思い出されるかたが少なくないと思います。私も、30 年前にボストンではじめてお目にかかって以来、国際学会の折などにはずいぶんと助けていただきました。ボルネオで見つかった蘚類の新属 *Benitotania* を献名できたことが良い思い出となりました。謹んでご冥福をお祈りします。

諸報告

2017 年度第 16 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 秋山 弘之

学会賞選考委員会において、ご本人や推薦人から提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料等をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞として 2 名、奨励賞として 3 名の方の受賞が決定しましたのでお知らせします。（それぞれ 50 音順）

学会賞

岡田 博（大阪市立大学名誉教授）

「被子植物の多様性、特に種レベルに現れる現象についての多面的解析への貢献」

小林 禧樹（兵庫県植物誌研究会代表）

「日本産テンナンショウ属の分類学的研究ならびに兵庫県の植物相解明への貢献」

奨励賞

伊藤 優 (中国科学院シーサンパンナ熱帯植物園外国籍フェロー)

「水生植物の進化系統分類の研究」

志賀 隆 (新潟大学人文社会・教育科学系准教授)

「水生植物を中心とした維管束植物の植物分類学および保全生物学の研究」

矢野 興一 (岡山理科大学生物地球学部生物地球学科講師)

「カヤツリグサ科植物の系統分類学的研究」

授賞理由は以下の通りです。

学会賞：

岡田氏は、染色体に着目して原始的被子植物の系統関係解明に取り組み、さらに東南アジア湿潤熱帯に分布するバンレイシ科の分類学的研究について数多くの貢献をされてきました。またキツネノボタンを含むキンポウゲ属植物のいくつかの種では染色体に見られる変異、交配様式等に注目し集団間変異・種間関係を解明し、さらにこの手法をヤブカラシに応用し、種のあり方の実体の解明にも貢献されています。スマトラ島・カリマンタン島を中心として、フロラの解明にも尽力されています。また2000年から2010年にかけて編集委員長として学会誌の発展に大いに貢献されました。

小林氏は、分類が難しいとされるサトイモ科テンナンショウ属に興味をもち、30年前から調査を続けてこられ、形態的形質や染色体数、胚珠の数などに注目して、特にヒガンマムシグサ群を中心に研究をされてきました。神戸市で最初に確認されたハリマムシグサ個体群については1992年から25年間のモニタリングを続けるなど、遺伝的多様性に着目した活動もされています。また神戸市や淡路島を中心に兵庫県の地域フロラの解明にも力をつくされており、2014年には「淡路島の植物相の特徴と注目される植物—改訂増補版を出版して」と題し学会講演会で発表されています。これまでに多数の植物標本作製し、それらは貴重な資料として多くの大学・博物館に収められています。

このように、お二人は植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その功績を称え、日本植物分類学会賞に選出いたしました。

奨励賞：

伊藤氏は、形態・染色体・分子データに基づいた地域新産種の報告や新種の記載、新分類体系の提唱、雑種の起源や倍数体の進化解明、長距離種子散布の起源推定などに取り組まれています。特に、カワツルモ科に関する一連の研究は、水生植物における長距離散布を示す先駆的な研究として高く評価されるものです。これまでに査読論文22本の他10本の報文を出版され、その他に9回の学会発表、2010年日中韓合同シンポジウムでの発表があります。また、『改訂新版 日本の野生植物』では、ヒルムシロ科・カワツルモ科を担当されています。

志賀氏は、他の維管束植物のグループに比べ研究が遅れている水生植物の分類学的研究に取り組むと共に、集団遺伝学的・生態学的な手法を用いて保全にかかわる研究を進められています。また現地調査、標本調査、文献調査を通じて、地域の植物相を解明し、過去からの植物相の変遷に関する研究を進めておられます。これまでに査読論文18本のほか、新知見や普及教育の47本の報文を出版されているだけでなく、20回の学会発表を行い、さらに『改訂新版 日本の野生植物』ではスイレン科、アリノトウグサ科を執筆担当されています。また、2013年から2016年には庶務幹事を担当され、その他にも絶滅危惧植物第一専門委員会委員、植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会委員、評議員を歴任されています。

矢野氏は、外部形態だけでなく、DNAを用いた系統解析と染色体を用いた細胞遺伝学的解析を同時に行うことで、分類学的な問題を多く含むカヤツリグサ科にとりくまれてきました。その結果、カヤツリグサ科の多様化には染色体の倍数性と異数性の両方が関係していることを明らかにされました。現在は中国やヒマラヤ地域にも対象地域を広げるとともに、国際的スゲ属植物研究グループの一員として活動を続けておられます。これまでに32本の査読論文、20編の報文を出版され、その他に12回の学会発表をおこなっておられます。また2010年学会論文賞を受賞されました。2015年から学会ホームページ担当

幹事を担当されています。

このように、3名の方は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞に選出いたしました。

2017 年度第 11 回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員長 田村 実

2017 年度第 11 回日本植物分類学会論文賞は、2016 年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』67 巻および和文誌『分類』16 巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文 8 編を論文賞選考委員会において審査し、次の 2 論文に決定しました。

Tono, A., Iwasaki, T., Seo, A. and Murakami, N. 2016. Postglacial lineage admixture in the contact zones of the two Japanese deciduous broad-leaved tree species estimated by nuclear microsatellite and chloroplast DNA markers. *Acta Phytotax. Geobot.* 67(1): 1–16.

選考理由：風媒と虫媒という花粉の散布様式の違いが樹木種の種内遺伝構造に大きな影響を与えることを複数の核 DNA マーカーを用いた多数の植物サンプルの解析によって解明している。あまり例を見ない研究で、難しい課題へのアプローチを試みている点が意欲的であり、高く評価できる。

Fujinami, R., Yoshihama, I. and Imaichi, R. 2016. Comparative morphology of chloroplasts in Podostemaceae subfamilies Tristichoideae and Weddellinoideae suggests evolution of chloroplast dimorphism. *Acta Phytotax. Geobot.* 67(1): 29–36.

選考理由：カワゴケソウ科の葉緑体二形性は、カワゴケソウ亜科内では広く見られる一方、トリスティカ亜科とウェデリナ亜科では見られないことから、カワゴケソウ亜科の進化の初期段階で獲得された可能性が高いことを示している。今後、水没する環境への適応進化に関する研究に結びつくことも期待され、高く評価できる。

2016 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 志賀 隆

2016 年 12 月 12 日～2016 年 12 月 28 日に 2016 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業報告案と会計決算案を評議員の方々に審議していただくものです。なお、12 月末日が会計締切であるため、この 2016 年第 1 回メール評議員会での決算額に概算部分があります。3 月 9 日の評議員会と 11 日の総会にて提案されます同議案には、その概算部分について最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2016 年 12 月 12 日～2016 年 12 月 28 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい角野康郎会長を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

- 第1号議案 2016年度事業報告案
- 第2号議案 2016年度決算案

審議結果

第1号議案, 第2号議案ともに1回の修正を経た後, 承認多数で可決された。委任状はなかった。

- 第1号議案 【賛成10票, 反対0票, 白票3票】
- 第2号議案 【賛成10票, 反対0票, 白票3票】

議事録署名人として田村実氏と布施静香氏が選出された。

2017年度第1回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 田中 伸幸

2017年度事業報告案, 予算案および会費値上げ(細則変更)案を評議員の方々に審議していただくため, 2017年1月14日~2017年2月6日に2017年度第1回メール評議員会が開催されました。以下の通り, 議事抄録を報告いたします。

開催日時: 2017年1月14日~2017年2月6日
開催方法: 電子メール等の媒体を用いた会議
参加者: 評議員全員

議長選出

慣例にしたがい伊藤元己会長を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

- 第1号議案 2017年度事業計画案
- 第2号議案 2017年度予算案
- 第3号議案 会費値上げ(細則変更)案

審議結果

第1号議案, 第2号議案については, 1回の修正を経た後, 承認多数で可決された。第3号議案については, 提案通り承認され, 修正はなかった。また, 委任状はなかった。

- 第1号議案 【賛成10票, 反対0票, 白票3票】
- 第2号議案 【賛成10票, 反対0票, 白票3票】
- 第3号議案 【賛成10票, 反対0票, 白票3票】

議事録署名人として海老原淳氏と志賀隆氏が選出された。

国際植物分類学シンポジウム

"East Asian Plant Diversity and Conservation 2016" の報告

国際シンポジウム準備委員長 池田 博

日中韓を中心とする国際植物分類学シンポジウム "East Asian Plant Diversity and Conservation 2016" が、2016年8月23日から25日にかけて、日本で開催されました(図1は大会ロゴ)。このシンポジウムは、植物分類学、進化学、生物地理学、および保全学等を研究する東アジア諸国の研究者に、最新の科学的知識の提供と情報交換を目的として、2008年より始められました。日本では2008年に札幌(北海道大学)で開催され、2011年にはつくば(国立科学博物館)で開催する予定でしたが、直前に起きた東日本大震災により中止となっていましたので、日本での開催は久しぶりとなりました。



図1. シンポジウムのロゴ
(@Mutsuko & Jun Nakajima 2016)

【組織と会場, 参加者】

このシンポジウムは、日本植物分類学会、中国植物学会分類進化部会(Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China)、韓国植物分類学会(Korean Society of Plant Taxonomist)の共催とし、日本からは池田(東京大学)、村上哲明(首都大学東京)、樋口正信(国立科学博物館)、中国からは Hong, De-Yuan(中国科学院植物研究所)、Sun, Hang(中国科学院昆明植物研究所)、韓国からは Choi, Byoung-Hee(Inha University)、Chung, Gyu-Young(Andong National University)各氏が準備委員となりました。

会場は、シンポジウムとポスター発表を東京大学弥生講堂一条ホール(東京都文京区)で、エクスカッションを栃木県日光市でおこないました。

このシンポジウムには、日本人54名、中国人・台湾人25名、韓国人19名の総計98名がご参加下さいました。

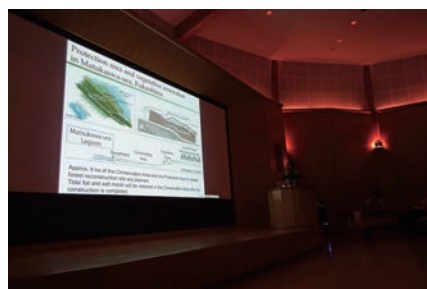


図2. シンポジウム発表風景
(撮影: 根本秀一)

【シンポジウムとポスター発表, 懇親会】

シンポジウムは一条ホール内の講堂で、ポスター発表は講堂の外側のホワイエ部分でおこなわれました。シンポジウムは8月23日終日および24日午前に3つのセッションに分けておこなわれ、日本、中国・台湾、韓国から18人のスピーカーに発表をして頂き、活発な質疑応答がなされました(図2)。

Session 1: Systematics and Evolution of Plants in East Asia

座長: 村上哲明・Chung, Kyong-Sook (Jungwon University, Korea)

Session 2: Plant Diversity and Phytogeography of E Asia

座長: 樋口正信・Hong, De-Yuan

Session 3: Threatened Plants and Their Conservation in East Asia

座長: 海老原 淳(国立科学博物館)・Chung, Gyu-Young

初日の午後にはポスターセッションの時間が設けられ、44題のポスターの前では発表者と質問する人の間で熱心なやりとりがなされていました(図3)。今回初めての試みとして、「ポスター賞」を設立しました。これは特に若手の研究者に対する奨励と顕彰を目的としたもので、準備委員と共催学会の会長、および座長に評価・投票をしてもらい、集計をおこないました。投票の結果、次の4題がポスター賞を受賞しました。

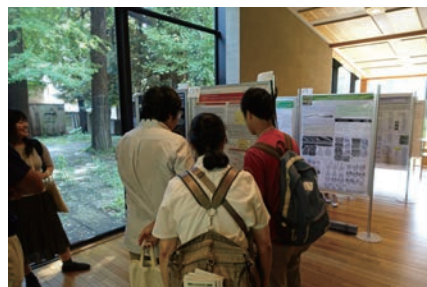


図3. ポスター発表風景(撮影: 根本秀一)

1. Phylogenetic study of *Rubus* (Rosaceae) with special emphasis on subgenus *Idaeobatus* (Ji-Young Yang, Jae-Hong Pak & Seung-Chul Kim).
2. Unique parallel radiations of genus *Sedum* (Crassulaceae) in a continental island of Taiwan (Takuro Ito, Chih-Chieh Yu, Koh Nakamura, Kuo-Fang Chung, Qin-er Yang, Cheng-Xin Fu & Goro Kokubugata).
3. Phylogeny and biogeography of *Atractylodes* (Asteraceae) and phylogeography of *A. macrocephala* (Minqi Cai, Luxian Liu, Li Zheng, Pan Li, Chuan Chen & Chengxin Fu).
4. Studies of phylogeography and domestication origin of Chinese bayberry (*Morella rubra*) (Luxian Liu, Nan Chen, Xian Li & Chengxin Fu).



図 4. ポスター賞授賞式
(撮影：首藤光太郎)

初日の夜には、東京大学本郷キャンパス内の山上会館で、80名以上の参加者を得て懇親会が開かれました。東京での開催ということで、特に郷土料理というものはありませんでしたが、海外からの参加者が多いということで、日本を感じさせる料理をお願いし、東京近郊の地酒を準備しました。席上、ポスター賞の発表をおこない、受賞者への賞状、記念品の授与、記念撮影がおこなわれました(図4)。記念品には江戸硝子と江戸切子を用意しました。

【エクスカージョン】

エクスカージョンは栃木県日光市で開催され、42名(日本人12名、中国人19名、韓国人11名)の参加を得て実施されました。24日午前のシンポジウム終了後、チャーターバスで日光に向かい、日光植物園(東京大学大学院理学研究科附属植物園日光分園)内を散策した後、温泉宿に宿泊しました。皆さん温泉でゆったりとし、夜は座敷で宴会と相なりました。

次の日はバスを仕立て、奥日光方面へ。いろは坂を登り、中禅寺湖を左に見ながら戦場ヶ原へ。湯ノ湖の周りを散策し、戦場ヶ原の展望を楽しみ、華厳の滝を遠望しました(図5,6)。湯ノ湖や戦場ヶ原の散策では、日中韓の研究者が生えている植物を観察しながら交流を深めていました。昼食は日光植物園の近くのそば屋で済ませ、日光東照宮を観覧した後、東京に戻ってきました。



図 5. エクスカージョン風景(撮影：山本伸子)



図 6. エクスカージョン集合写真(撮影：邑田仁)

【収支】

今シンポジウムの収支決算報告の概要を以下に示します。この国際シンポジウムは、2008年以来、日本、中国、韓国の持ち回りで開催していますが、近年は開催国以外の国からの参加者が少なく、開催することの意義さえ疑問視されていました。しかし、近隣諸国の研究者と親しく交わり、お互いの意見交換をしたり情報を得ることは必要で有意義なものであると考え、今回は海外からできるだけ多くの参加者を得ることを目標としました。そのために、海外の研究者に積極的に声をかけるとともに、国外からの招待講演者の滞在費補助、国外からの一般参加者の参加費・懇親会費の免除など、海外からも参加しやす

いよう配慮しました。その結果、大会参加者の半分近い44名が海外からの参加者でした。これには学会で積み立てられた国際シンポジウム積立金が大きく貢献しています。

"East Asian Plant Diversity and Conservation 2016" 収支報告概要

収入		支出	
学会からの補助	1,200,000	一条ホール使用料等	229,100
参加費(含 懇親会費)	480,000	要旨集印刷代・振込手数料	134,352
		ロゴマーク デザイン料	30,000
		懇親会費	523,983
		貸切バス代・高速道路代等	236,140
		外国人招待者宿泊費	352,800
		通信費(EMS等)	22,820
		文房具類等	33,872
		アルバイト代・謝金等	116,933
計	1,680,000	計	1,680,000

【次回開催について】

大会開催中に、準備委員会のメンバーで、次回の開催地と開催時期について打ち合わせをおこないました。このシンポジウムは3国持ち回りで毎年開催していましたが、毎年の開催は開催国の負担が大きく、準備にも時間がかかることから、隔年開催としてはどうかという意見が出ました。そこで、次回は2018年に中国での開催とし、準備の責任者を浙江師範大学の金孝鋒(Jin, Xiao-Feng)教授にお願いすることとなりました。また、その次は2020年に韓国で、ということになっています。

【終わりに】

この国際シンポジウムの開催については、準備委員長の動きが遅く、関係する方々や学会員の方々にもご迷惑をおかけしました。準備段階でも、役割分担がきちんとなされていないところもあり、開催間際まであたふたとしてしまいました。次回の日本開催(2022年予定)の際には、できるだけ早く組織を立ち上げ、余裕をもって準備をする必要があるかと思えます。

また、今回は学会から補助をいただき、それを有効に活用させていただいたおかげで多くの海外からの参加者があったと思われます。もちろん、魅力的なテーマ設定や効果的なアナウンスも必要なことですが、経済的な負担を軽くする方策も、特に若い研究者には必要なことではないかと考えます。開催に当たっては、各種補助金を得る努力も必要と思いますが、なかなか難しい現実もあります。このシンポジウムの意義を認識していただき、学会からの補助(積立金)を再開していただきますよう希望いたします。

最後になりましたが、このシンポジウムに積極的に参加して盛り上げていただいた国内外の参加者の皆様に感謝申し上げます。特に、組織委員を務めていただいた樋口正信さん、村上哲明さん、山本伸子さん、要旨集の発行、エクスカージョンの実施などにご協力いただいた国立科学博物館の岩科司さん、海老原淳さん、田中法生さん、保坂健太郎さん、東京大学の邑田仁先生、舘野正樹先生、岡田美知子さんには厚くお礼申し上げます。中島睦子さん、中島純さんご両名には素敵な大会ロゴマークを作ってくださいました。ここに感謝申し上げます。

国際植物分類学シンポジウムの参加を通じて

東京農工大学大学院博士後期課程 伊東 拓朗

2014年から2年間の中断期間を経て、満を持して昨年開催された国際植物分類学シンポジウム。2013年から当分野にて研究活動を開始した私にとっては初めての参加となった。内容に関して、まず口

頭発表セッションでは初日午前は系統分類・進化、午後は多様性・植物地理、2日目は絶滅危惧種とその保全というテーマで行われた。ベーシックな系統分類から最新の解析技術を駆使した研究の発表など、内容も多岐にわたり、良い意味で漸進的に変化する当研究分野を表した内容であったと思う。若手学生の発表が多くみられ、堂々と発表している姿には特に刺激を受けた。ポスター発表セッションでは、維管束植物はもちろん、コケ類から菌類まで幅広い分類群において、分類や系統、植物地理、生態、保全と多岐にわたる分野の興味深い研究を拝聴できた。ポスターも学生が多く発表しており、特に海外の研究者と直接話し合い、議論を深める様子が見られるなど、大変賑わっていた。

私自身、本シンポジウムにてポスター賞という名誉ある賞をいただくことができたのだが、これを通じて自身の研究を始めることができた“きっかけ”の重要性と、それによってもたらされた“人々との繋がり”がいかに研究を支えているのか、ということは今一度認識させられた。私は東アジア地域全体のマンネングサ属の系統分類や進化について研究を行っており、中でも台湾高山固有のマンネングサ属種に重点を置いて研究を行っている。わずか2年半前まで台湾に一度も行ったこともなかった自分が、今どっぴりとメインの研究フィールドにしていることが半ば信じられないが、これは台湾交流協会の若手研究者交流事業をきっかけにして始まったことである。そこから多くの人々との繋がりができ、台湾大学や中央研究院、台湾林業試験所、台湾大学山岳部や植物をよく知るアマチュアの方々、さらには“友達の友達の父母”にまで力添えいただき、現在の研究は成立している。

国際シンポジウムは、まさに研究のきっかけや、人々との繋がりを広げる絶好の機会だと思う。本学会では日本国内の植物等を研究されている方が多いが、日本の植物を研究する上で、類似した植物相を共有している日中韓等の近隣地域を含めた網羅的な研究が必要になることも多い。しかしながら、現実的に生物学的にはなんら意味を持つものではない国境の壁は高く、やりたくてもなかなか出来ないこともある。そこでこのような人と人との繋がりを構築できる場合は、そういったジレンマを解消するために非常に有意義な機会だと考えられる。実際に本シンポジウムにて、自身の研究と大きく関連のあるヒマラヤの造山運動と連動した植物の放散現象を主に研究されている方と議論できた。これは自身の研究を新たな角度から見つめることに繋がり、更なる研究のフィールドを広げるきっかけとなることを確信している。こういった機会を通じて、もう一步広い世界の視点から自身の研究活動を俯瞰して進めていくことで、理解がより深まることや解決できること、思いもよらない方向に向かっていくこと等、もたらされる膨大な可能性の広がりを再確認した。

次回、中国にて開催予定の国際シンポジウムも、自身の世界を広げていくまたとない機会。また参加したいし、多くの若手にもぜひ参加いただいて、積極的に交流していきたい。

2016年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 岡崎 純子

2016年度の日本植物分類学会講演会が2016年12月17日(土)に大阪学院大学で開催されました。現在の植物分類学会が設立されてから16回目の講演会となります。今回は長くこの会場を本学会の講演会や大会会場として提供下さった林一彦先生の退職の年度にあたり、大阪学院大学の学生の方や事務局の方の参加も多く134名(学生29名)うち会員47名の参加者がありました。ご講演頂いた演者とその演題は以下の順でした。

藤井 伸二 (人間環境大学・人間環境学部) : 海岸線の植物

岩崎 貴也 (京都大学・生態学研究センター) : 日本の温帯林植物における集団分化の歴史 : 現在の遺伝的地域性はどのようにして形成されたか?

海老原 淳 (国立科学博物館) : 日本産シダ植物の多様性総覧を目指した新図鑑の試み

戸部 博 (京都大学名誉教授) : ハナイカダとその仲間に見られる花と生殖器官の進化

工藤 洋 (京都大学・生態学研究センター) : 河野先生とのフィールドワーク

田村 実 (京都大学・大学院理学研究科) : 広義ユリ科の世界 (スライド講演)
林 一彦 (大阪学院大学・経済学部) : ユリ属植物の故郷をめぐって

今回もどの方にも幅広い内容の話のわかりやすく熱心にご講演頂きました。藤井伸二さんには日本全国の海岸線の植物についてその分布や生態についてお話いただきました。特に海跡湖については、海岸から内側に入った汽水池や淡水池の中には元々海だった箇所が切り離され、その周囲に既に失われた海岸の希少種が分布しているという非常に興味深い話でした。また若手の岩崎貴也さんには現在進められている系統地理的な研究をお話いただきました。さらに海老原淳さんには2016年に出版されたばかりの『日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ』ができあがるまでの苦労話をしていただきました。戸部博さんには葉の上に花をつけるという特徴的な植物ハナイカダを材料としてその系統的な位置づけとモチノキ目でのこの種の花の進化がなぜ起こったのかという楽しい話をさせていただきました。後半は2016年秋に亡くなられた元京都大学名誉教授河野昭一先生と関連の深かった方々(工藤洋さん、田村実さん、林一彦さん)にお願いして、ご自分のご研究内容とあわせて河野先生との思い出もお話し頂きました。河野先生は京都大学総合博物館の設立にご尽力され初代の館長を兼任され、京都大学植物標本庫の発展に貢献をされた先生でした。指導教官の写真というのは結構少ないものですが、河野先生の野外調査によく同行された工藤さんからはお宝のような写真が出てきて本当に懐かしい限りでした。田村実さんの広義ユリ科のスライド講演も美しいものでした。最後に林一彦さんは河野先生の最も古い弟子のお一人で、ご自分のユリ科研究に加え河野先生のお人柄をしのばせる若かりし頃のエピソードも披露していただきました。

終了後に開催された懇親会には29名の参加者があり演者を囲みアマチュアの研究者の方々も参加され、最近の恒例の自己紹介タイムなど交流を深め楽しく時をすごすことができました。

お話を提供して下さった演者の7名の方々、また参加者の皆様方、毎年この会場をお世話くださいました大阪学院大学の林一彦先生と大阪学院大学の方々に感謝いたします。



写真 1. 海老原淳さんによる講演の様子



写真 2. 林一彦さんによる講演での河野昭一先生との思い出のお話の様子



写真 3. 懇親会参加者

2016 年度日本植物分類学会講演会に参加して

豊田 和彦 (大阪教育大学大学院)・西浦 心太郎・萩原 奨真 (大阪教育大学理科教育)

2016 年度日本植物分類学会講演会は 12 月 17 日 (土) に開催されました。今回ご講演くださったのは、7 名の方々でした。その中には、この秋に亡くなられた京都大学名誉教授 河野昭一先生との思い出話を交えながらのお話もありました。植物分類における学術的な内容に関して、初心者である私たち学生や

一般の方々も参加できるように、講演内容も専門的な内容から一般向けの分かりやすい内容まで多岐にわたる講演でした。このような貴重なお話を専門家である方々から伺うことができたこと、さらには最新的话题をはじめ、多くのことをこの機会に学べたこと嬉しく思いました。

藤井伸二先生からは、「海岸線の植物」についてお話をいただきました。海岸は塩分、波浪、潮汐などの影響を様々な程度に受ける環境にあり、それぞれに特徴的な植生があります。その例としていくつかの海岸植生などの紹介をされました。岩場に生育するスカシユリ、ワスレグサ、イワタイゲキなどの植物や、砂浜のハマベノギク、ハマハタザオ、トウテイラン、ハギクソウ、ハマネナシカズラなどの植物が紹介されました。海浜植物の普通種として知られる植物には分布が偏在する種類も多く、たとえばハマネナシカズラやハマナデシコ、ボタンボウフウなどとは日本海側にはほとんど見られないそうです。反対にハマハタザオ、スナビキソウ、ハマベノギクなどは日本海側に偏在しているそうです。さらに海跡湖についてのお話がありました。海跡湖は、(1) 砂州や砂嘴の発達によって海湾の一部が海から隔てられ成立したもの、(2) 陸繋島と陸岸を結ぶ2本のトンボ口に囲まれて成立したもの、(3) 沿岸州や砂丘が海岸に発達し入江や河口をせきとめて成立したもの、(4) 海進、海退あるいは陸地の沈降・隆起などにより成立したものなど、種々のタイプに区分されます。今回は特に三重県海跡湖に注目して紹介してくださいました。三重県海跡湖の特徴は小規模なものが多く、これは地形との関連があります。ここにはハマナツメやシログワイ、アズマツメクサなど希少な植物の群落が見られます。このような場所では、海跡湖が平野や氾濫原に生育する希少植物にとっての代替環境になっていることがわかりました。

岩崎先生は、「日本の温帯林植物における集団分化の歴史：現在の遺传的地域性はどのようにして形成されたか？」と題して、日本列島におけるブナなどの温帯林植物がどこからどのように移動して今の場所にいるのか、その研究を主として話されました。数種の落葉樹の集団分化のパターンの類似性から、これらの地域集団が氷期には小集団に分断され、分布域を移動させながら、障壁がない時は地域集団間で交流し、ある時には交流は停止して、現在の分化がみられるようになったことがわかりました。このような解析には、最近ではコアレセントシミュレーションで「いつ、どのように分化すれば、現在の遺传的地域性が再現されるか」をコンピュータを使って推定する手法も紹介してくださいました。最後にキンポウゲ科多年生草本ミスミソウでの次世代シーケンサーを使った RAD-Seq 解析から、この種における種分化の時期とパターンについて明らかになってきた研究の紹介をされました。話の中で先生が熱く語られたのは、遺传的地域性は「地域の自然遺産」であり、同じ植物でもその遺伝子は大きく違っているかもしれないし、何万年、何十万年、何百万年レベルの歴史の結果であるから、一度失われると取り返しがつかないという思いでした。

海老原先生からは、「日本産シダ植物の多様性総覧を目指した新図鑑の試み」と題して、日本産シダ植物標準図鑑ができあがるまでの苦労や新しい試みについて講演をいただきました。この図鑑の作成のために日本シダの会のメンバーにお願いして図鑑のためのプロジェクトチームをつくり、多くのアマチュア研究者の方々のかみ借りながら、さまざまな苦労を乗り越え第1巻ができたことが理解できた講演でした。近く第2巻も出るという予告を聞いたことを嬉しく思いました。

戸部先生からは「ハナイカダとその仲間に見られる花と生殖器の進化」について講演をしていただきました。ハナイカダ科は1属4種からなるモチノキ目の植物です。モチノキ目の中でもフィロノマ科とハナイカダ科は葉の上に花をもつ仲間（葉上花序）で、子房下位の共有派生形質をもつ姉妹群関係にあります。モチノキ目の植物は花が小さく目立たないため、葉上に花をつける戦略をフィロノマ科とハナイカダ科がとったのではないかと考えられるそうです。お話しする先生の表情から研究することの楽しさが伝わりました。また、研究成果が自分の努力した軌跡となってこれから後世に残っていくことの喜びを述べられていたことが印象的でした。

工藤先生からは、「河野先生とのフィールドワーク」と題してお話をいただきました。河野先生の元で大学院生であった当時、現代のようなDNA解析も発達しておらず、代わりにアロザイムを解析することで、アメリカ南部に存在するタネツケバナの集団的性質について河野先生と一緒に調べられたそうです。最近ではタネツケバナについて、エピジェネティクスからの視点での形態的可塑性についての遺伝子レベルでの解明を進めているというお話をされました。

田村先生からは、「広義ユリ科の世界」と題してお話をいただきました。かつての広義ユリ科の植物には、

クサスギカズラ目, ユリ目, ヤマノイモ目, サクライソウ目, オモダカ目と別系統が多く含まれていたことがわかっています。なぜ別系統でありながら広義ユリ科が共通の特徴を持つのか, 美しい植物写真を紹介しながら説明くださいました。

林先生からは「ユリ属植物の故郷をめぐって」と題してユリ科の起源が東アジアと推定されることや, このグループの系統関係を研究することの難しさとして, ヒトの園芸利用により思いがけない種間交雑が起こってしまった例などをお話くださいました。

今回の講演内容は様々な分野から構成されており, 非常に多くのことを学ぶことが出来ました。また, どの講演の先生方も一般の方々や僕たち学生のために, 発表内容を分かりやすいように工夫してくださいましたのでとても聞きやすい講演でした。数多くの貴重なお話を下さった先生方, ありがとうございます。

お知らせ

2017 年度第 16 回日本植物分類学会賞受賞記念講演および大会公開シンポジウム 「春が来た! 野山の草のサイエンス」のご案内

第 16 回大会実行委員会 公開講演会担当 瀬戸口 浩彰
同事務局長 布施 静香

本大会では, 学会賞受賞記念講演と公開シンポジウムの両方を一般公開します。会員・非会員を問わず, 無料でご聴講いただけますので, 関係者にご周知いただき, 多数ご参加いただきますようお願い申し上げます。事前の申し込みは不要です。

【日時】2017 年 3 月 12 日 (日)

学会賞受賞記念講演 9 時 30 分～11 時 50 分

公開シンポジウム 14 時～16 時

【場所】京都府立 京都学・歴彩館 1 階大ホール
(京都市左京区下鴨半木町)

【アクセス】京都市営地下鉄烏丸線「北山駅」①出口
南へ徒歩約 4 分

【京都府立植物園への入園と昼食について】

大会期間中 (3 月 9 日～12 日) は, 大会参加者は, 大会の名札を提示することで, 入園料と園内の観覧温室の入館料が無料になります。

京都学・歴彩館内は飲食禁止となっておりますので, 昼食は近隣の飲食店等をご利用ください。植物園を散策しながら昼食をとられるのもおすすめです。

【公開シンポジウム】

この季節にちなんで, 身近な植物であるタンポポにまつわる「へえ～」というお話, 愛好家が多い雪割草 (ミスミソウ) の「ほお～」というお話, 開催地である京都の植物園の「見どころ」と「うんちく」をまとめて 3 話ご提供します。

1. 西田 佐知子 (名古屋大学博物館) 「セイヨウはなぜ強い? タンポポから探る繁殖干涉」

2. 亀岡 慎一郎 (京都大学 人間・環境学研究所) 「雪割草の花は, なぜ多彩なのか」

3. 長澤 淳一 (京都府立植物園長) 「春の植物～桜と桜草」

オーガナイザー: 瀬戸口 浩彰



【お問い合わせ】日本植物分類学会第16回大会（京都）実行委員会 布施静香
Tel & Fax : 075-753-4145 E-mail : jsps16@sys.bot.kyoto-u.ac.jp
(お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使い下さい)

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 田中 伸幸

日本植物分類学会第16回大会（京都）の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催いたします。評議員、幹事会等の関係各位のご出席をよろしくお願いいたします。

日時：2017年3月9日（木）16時～19時

会場：京都大学大学院理学研究科2号館1階113室（京都市左京区北白川追分町）

なお、詳細は関係各位におってご連絡いたします。審議事項につきましてご意見やご要望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

2017年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 田中 伸幸

前庶務幹事 志賀 隆

3月11日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2016年度事業報告案（15ページ参照）
2. 2016年度決算報告案（18ページ参照）
3. 2017年度事業計画案（16ページ参照）
4. 2017年度予算案（19ページ参照）
5. 会費値上げ（細則変更）案（20ページ参照）

2016年度事業報告案

(1) 集会等の開催

・学術集会、講演会、研修会

年次学術集会（日本植物分類学会第15回大会：3月5～8日、富山大学）を開催した（ニュースレター No. 61 で報告）。

2016年度講演会（12月17日、大阪学院大学）を開催した（ニュースレター No. 64 で報告）。

2016年度野外研修会（新潟県佐渡市）を開催した（5月20日～22日）（ニュースレター No. 62 で報告）。

「東アジア国際植物分類学シンポジウム2016」（8月23～25日、東京大学）を開催した（ニュースレター No. 64 で報告）。

・総会、評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催した（3月7日）（ニュースレター No. 61 で報告）。

評議員会を1回（ニュースレター No. 61 で報告）、メール評議員会を1回開催した（ニュースレター No. 64 で報告）。

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 67 巻 1～3 号（計 3 冊）を発行した。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 16 巻 1～2 号（計 2 冊）を発行した。
- ・ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』60～63 号（計 4 冊）を発行した。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動した。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会（藤井委員長）
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会（樋口委員長）
- ・植物データベース専門委員会（伊藤委員長）
- ・学会賞選考委員会（ニュースレター No. 60 で報告）（秋山委員長）
- ・論文賞選考委員会（ニュースレター No. 60 で報告）（田村委員長）
- ・大会発表賞選考委員会（ニュースレター No. 61 で報告）（池田委員長）
- ・ABS 問題対応委員会（村上委員長）
- ・国際シンポジウム準備委員会（池田委員長）
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会（角野委員長）

(4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 60 で報告）。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 60 で報告）。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った（ニュースレター No. 61 で報告）。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)、および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携して国際シンポジウムの定期開催に向けた準備を進めた。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）から『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』の公開を開始した。『分類』については、J-STAGE での公開に向けた準備を進めた。
- ・植物分類学研究マニュアルの作成を進めた。
- ・会長・評議員の選挙を行った（ニュースレター No. 62 で報告）。

2016 年度決算報告案 → 18 ページに掲載

2017 年度事業計画案

(1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会
年次学術集会（日本植物分類学会第 16 回大会：3 月 9～12 日 京都市）を開催する。
2017 年度講演会を開催する（日時、場所共に未定）。

2017年度野外研修会を開催する（日時、場所共に未定）。

- ・総会、評議員会
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3月11日）。
- 評議員会を開催する（3月9日）。

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第68巻1～3号（計3冊）を発行する。
和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第17巻1～2号（計2冊）を発行する。
- ・ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』64～67号（計4冊）を発行する。

(4) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
絶滅危惧植物専門第一委員会では、各都道府県の主任調査員・調査員の協力の下に、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する。
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
コケ類、藻類、菌類、地衣類の各グループの委員及び調査協力者により、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する。
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS問題対応委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会
- ・国際命名規約邦訳委員会

(5) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

(6) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)、および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。

(7) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・『植物分類学研究マニュアル』（仮題）の出版計画を進める。

2016年度予算案 → 19ページに掲載

2016年度
決算報告案
(2017.2.2時点)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常(一般)	5,000	740	3,700,000	3,327,600	△ 372,400
通常(学生/海外)	3,000	98	294,000	245,120	△ 48,880
団体会員	8,000	23	184,000	216,000	32,000
バックナンバー販売			100,000	62,060	△ 37,940
命名規約(ウィーン規約)販売			0	0	0
利息			1,000	793	△ 207
雑収入			50,000	110,425	60,425
小計			4,329,000	3,961,998	△ 367,002

注1

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100,000	100,000	0
講演会補助費			70,000	60,492	9,508
出版物印刷費					
APG vol.67(1,2,3)	750,000	3	2,250,000	2,649,298	△ 399,298
分類vol.16(1,2)	650,000	2	1,300,000	1,500,282	△ 200,282
ニュースレターNo.60-63	50,000	4	200,000	209,520	△ 9,520
英文校閲費			50,000	50,000	0
出版物送料					
APG送料	100	3,000	300,000	312,312	△ 12,312
和文誌送料	100	2,000	200,000	0	200,000
NL送料	80	4,000	320,000	443,531	△ 123,531
会議費			80,000	47,265	32,735
学会賞表彰経費			60,000	41,840	18,160
自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0
分類学会連合分担金			10,000	10,000	0
事務局管理費					
消耗品費			50,000	71,020	△ 21,020
交通費			150,000	110,250	39,750
アルバイト賃金			200,000	148,632	51,368
封筒等印刷費			50,000	20,412	29,588
通信費(小包手数料を含む)			70,000	44,865	25,135
手数料・その他			30,000	12,658	17,342
自動振替集金代行基本料			3,240	6,480	△ 3,240
自動振替口座確認手数料	130	170	22,100	20,476	1,624
レンタルサーバー使用料			26,000	26,244	△ 244
国際シンポジウム積立金			0	0	0
予備費			100,000	36,720	63,280
合計			5,661,340	5,942,297	△ 280,957

注2

注2

注3

注3

注4

注5

注6

注7

単年度収支	△ 1,332,340	△ 1,980,299	647,959
前年度からの繰越金	6,515,114	6,515,114	0
次年度への繰越金	5,182,774	4,534,815	647,959

注1:特別会計分の利息を含む。

注2:ページ数(カラー含む)の増加。

注3:NLと分類は同時発送。

注4:雑誌類の発送用ラベルを大口で購入したため。

注5:CIIniiからJ-STAGEの移行確認の謝金が必要なかったため。

注6:処理の手違いにより新規登録分の引落としが3月に行われたため。

注7:選挙に関わる支出。

特別会計

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	3,087,677	3,087,677	0
国際シンポジウム積立金	0	0	0
命名規約和訳販売	35,520	249,200	213,680
寄付	0	0	0
利息	0	0	0
合計	3,123,197	3,336,877	213,680
支出			
命名規約和訳出版	0	0	0
国際シンポジウム準備金	1,200,000	1,200,000	0
国際シンポジウム若手派遣	0	0	0
次年度への繰越金	1,923,197	2,136,877	△ 213,680
合計	3,123,197	3,336,877	△ 213,680

注1

注1:定価2,800円×50%×販売数178部=249,200円。

2017年度予算案
(2017.2.2時点)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常（一般）	5,000	725	3,625,000	△ 75,000	注1
通常（学生/海外）	3,000	124	372,000	78,000	注1
団体会員	8,000	19	152,000	△ 32,000	注1
特別会計から移管			1,250,000	1,250,000	注2
APG編集補助費			540,000	540,000	注3
バックナンバー販売			0	△ 100,000	注4
利息			0	△ 1,000	注4
雑収入			0	△ 50,000	注4
合計			5,939,000	1,610,000	

支出の部

大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費					
APG vol.68(1,2,3)	880,000	3	2,640,000	390,000	注5
分類vol.17(1,2)	650,000	2	1,300,000	0	
ニュースレターNo.64-68	50,000	4	200,000	0	
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料					
APG送料	100	3,000	300,000	0	
和文誌送料	100	2,000	200,000	0	
NL送料	80	4,000	320,000	0	
会議費			50,000	△ 30,000	注6
学会賞表彰経費			50,000	△ 10,000	注7
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合分担金			10,000	0	
事務局管理費					
消耗品費			50,000	0	
交通費			25,000	△ 125,000	注6
アルバイト賃金			0	△ 200,000	注8
封筒等印刷費			200,000	150,000	注9
通信費（小包手数料を含む）			50,000	△ 20,000	注7
手数料・その他			20,000	△ 10,000	注7
自動振替集金代行基本料			3,240	0	
自動振替口座確認手数料	130	160	20,800	△ 1,300	注10
レンタルサーバー使用料			26,000	0	
国際シンポジウム積立金			0	0	
予備費			100,000	0	
合計			5,805,040	143,700	

単年度収支	133,960	
前年度からの繰越金	4,534,815	
次年度への繰越金	4,668,775	

注1:会員数見直しによる（新入会、名誉会員増、退会・除名・逝去など）

注2:繰越金と併せて1年間の予算執行に必要な資金を特別会計から移管する。

注3:APG編集費のうち、会費収入のみでは不足する資金を特別会計から補填（180,000円/号）。

注4:会費以外の収入を特別会計に変更。

注5:前年の水準に従い修正。

注6:幹事引継会議がないため減額。

注7:前年の水準に従い修正。

注8:事務局管理に関する定期的なアルバイトは設けないため。

注9:新執行部による運営開始に伴い新たな封筒の印刷が必要になるため。

注10:自動振替利用者の更新。

特別会計

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2,136,877	△ 950,800
国際シンポジウム積立金	0	0 注1
命名規約和訳販売	140,000	104,480 注2
バックナンバー販売	60,000	60,000 注3
利息	750	750 注3
雑収入	50,000	50,000 注3
APGカラーチャージ	486,000	486,000 注4
調査委託費	10,000,000	注5
寄付	0	0
合計	12,873,627	9,750,430

注1:2017年度以降の開催予定が未定のため、積立を行わない。

注2:2016年の実績に基づき100部販売することを想定(2,800円×50%×100部=140,000円)。

注3:一般会計の会費以外の収入を特別会計に変更。前年度の実績に即して更新。

注4:APGのカラー図表に対する課金(18,000円×27個として計算)。

注5:絶滅危惧維管束植物の調査委託(環境省より)。

支出	予算	前年度予算との差異
命名規約和訳出版	500,000	500,000 注6
国際シンポジウム準備金	0	△ 1,200,000 注7
国際シンポジウム若手派遣	0	0 注7
APG編集補助費	540,000	注8
APG編集作業への謝金	51,000	注9
一般会計へ移管	1,250,000	注10
絶滅危惧植物の調査費	9,500,000	注11
絶滅危惧植物の調査に関連する雑費	500,000	注12
次年度への繰越金	532,627	△ 1,390,570
合計	12,873,627	9,536,750

注6:次回の出版に備えた積立金。

注7:シンポジウムの開催がないため。

注8:APG編集費のうち、会費収入のみでは不足する資金を特別会計から補填(180,000円/号)。

注9:APGの編集作業を補佐する作業に対する謝金(17,000円/号)。

注10:繰越金と併せて1年間の予算を確保するための補填する。

注11:絶滅危惧維管束植物の調査費。

注12:絶滅危惧植物の調査に関連する振り込み手数料などの事務経費。

会費値上げ(細則変更)案

財政基盤の健全化を図るため、2018年度より現在5,000円の一般会員の会費を7,000円とする。これに伴い、日本植物分類学会規約の会員の権利と会費についての細則第2条を下記のとおり改定する。

旧
第2条 本会の会費は、次のとおりとする。
(1) 通常会員 年 5,000円
ただし、
学生の場合 年 3,000円
海外在住の外国籍会員の場合 年 3,000円
とする。
(中略)

附則 本細則は2001年5月12日より実施する。

新
第2条 本会の会費は、次のとおりとする。
(1) 通常会員 年 7,000円
ただし、
学生の場合 年 3,000円
海外在住の外国籍会員の場合 年 3,000円
とする。
(中略)

附則 本細則は2001年5月12日より実施する。

附則 本細則は2017年3月11日より実施する。

会費の値上げについて

庶務幹事 田中 伸幸

学会の財政基盤の健全化のためには、会費の値上げはもはや避けることができない課題となっていることにつきましては、ニュースレター No. 61 ~ 62 におきまして前会長よりお知らせした通りです。これまでさまざまな経費削減なども検討し実施してきましたが、少なくとも通常会員の会費 2,000 円の値上げが必要と考えられました。

この議案につきましては、2017 年度第 1 回メール評議員会で評議員の皆様にお諮りしたところ、2018 年度より通常会員 7,000 円、学生 3,000 円（据え置き）とし、細則を変更することで承認 10 票、不承認 0 票にて可決されました。次の総会ではこの改定案（20 ページ参照）についての本審議を行う予定です。

インターネットによる学会誌の閲覧について

編集委員会 J-STAGE 担当 布施 静香・池田 博

図書幹事 高野 温子

これまで、学会誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』および『分類』のデジタルデータは、国立情報学研究所の電子図書館（NII-ELS）で公開されてきました。この度、NII-ELS が事業を終了することとなったため、今後は両誌とも、科学技術振興機構の科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）で公開されることとなります。

すでに『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』は 67 巻 2 号から、『分類』は 16 巻 2 号から J-STAGE での公開が始まっています。当学会ホームページ (<http://www.e-jsps.com/>) にリンクがはられていますので、ぜひご覧ください。

なお、NII-ELS で現在公開中の記事（『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』1 巻 ~ 67 巻 1 号、『分類』1 巻 ~ 16 巻 1 号）につきましては、2017 年 3 月末をもって NII-ELS で閲覧できなくなる予定です。これらの記事については、順次 J-STAGE での公開へ切り替えて参りますが、切り替え作業の進捗により閲覧できない期間が生じる見込みです。ご不便をおかけ致しますが、どうぞ宜しくお願い致します。

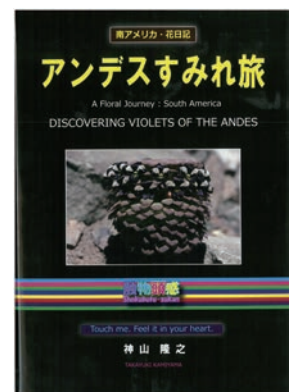
書評

南アメリカ・花日記 アンデスすみれ旅

神山 隆之 / 著 自費出版

定価：4,320 円（本体価格 4,000 円 + 税）B5 判 301 ページ

スマレの自然雑種発見や図鑑の編集などに携われた著者の、スマレ愛、植物や自然愛あふれる 1 冊です。300 ページにもなる本の大半が、アンデスで出会ったスマレをはじめとする数多くの植物写真です。一度も南米を訪れたことがない私にとって、ロゼットヴィオラや翡翠色の花ブヤ・ペルテロニアなど、一度は見てみたいと思う植物ばかりで、大変見応えがあります。風景写真も多く掲載され、見ているだけでチリ、アルゼンチンを旅した気分になります。子供の頃からの夢であったアマゾン訪問、そしてスマレをまとめた、77 歳にしてその夢を叶えられた、思いの詰まった 1 冊です。ニュースレターをご覧になられた方は税込 4,000 円とのことです。お問い合わせや購入のご相談は、メールにて著者までご連絡をお願いいたします（神山 隆之 E-mail : t-kami@sea.plala.or.jp）。



伝わるデザインの基本 増補改訂版 よい資料を作るためのレイアウトのルール

高橋 佑磨, 片山 なつ / 著 技術評論社 / 発行 ISBN : 978-4-7741-8321-3
定価 : 2,138 円 (本体価格 1,980 円+税) B5 変形判 240 ページ



すでに研究のポスター発表やプレゼン資料の作成時に参考にしてている方も多いでしょう。かくいう私もニュースレターの編集作業の参考に使っています。

2016 年夏, 重版出来の際に増補改訂され, 内容もボリュームアップし, かつ見やすくなりました。書籍では, フォントの選び方, 文章や図の配置, 配色, それに図や表の作り方まで, どうすると見やすく, わかりやすくなるのか, 多数の事例とともに解説されています。事例を見比べていると, デザインがいかにか「伝える」ことに重要かよくわかります。著者の 2 人は気鋭の若手研究者で当学会員でもあります, 企業から講演会を頼まれるほどの人気だとか。研究者だけでなく, 伝える職種の方にとって, 必読の 1 冊となりつつあります。もとは web ページではじまった「伝わるデザイン」研究発表のユニバーサルデザイン」。web ページも良いですが, 手元にあるとやはり便利な 1 冊です。

街なかの地衣類ハンドブック

大村 嘉人 / 著 文一総合出版 / 発行 ISBN : 978-4-8299-8132-0
定価 : 1,512 円 (本体価格 1,400 円+税) 新書判 80 ページ

これはなに? うーん, 地衣類。それで終わっていた方, 同定が難しく, どこからとっつけばよいかわからなかった方にとって朗報です! 初心者むけのわかりやすい地衣類のハンドブックができました。素晴らしいと思ったのは, 色別で分類できること。まずは遠目で色で分類, そして近づいて生態写真と比べていきます。野外での見つけやすさがかかっているのも大変参考になります。身近で代表的な地衣類 58 種がわかる, 地衣類のとっかかりにはもってこいの 1 冊です。表紙のデザインがかわいいのもお気に入りです。



日本産シダ植物標準図鑑 I

海老原 淳 / 著 学研プラス / 発行 ISBN : 978-4-05-405356-4
定価 : 21,600 円 (本体価格 20,000 円+税) A4 変形判 477 ページ

日本のシダ植物を網羅した, 新しいタイプの図鑑の第 1 巻です。値段は高めですが, これだけの情報が, このボリュームでカラーで盛り込まれていることを思うと, むしろ安いと感じます。ともかく各種についての情報が詳細で丁寧です。生態写真だけでなく, 標本をベースにした写真は, シダの細かな特徴やそれぞれ違いがわかりやすくなっています。日本ではどこに分布するのか, 詳細な分布図もついています。解説には, 倍数性や生殖様式など最新の研究をふまえた情報も掲載されており, 水分要求や光要求度合いといった栽培者向けの生育環境情報まで盛り込まれています。さらに必見なのが, 検索表をかねた全種の形態比較表! まさに日本のシダ植物の集大成となる, 画期的な図鑑です。全 2 巻で, 次巻は 3 月末に発売予定とのこと。す。



(堤 千絵, 国立科学博物館植物研究部)

編集室より

今号は3月の大会に関連する案内だけでなく、講演会やシンポジウムの報告など満載です。ぜひお見逃しなく。

2年間ニュースレターに関わってきて感じたのは、学会に関連する事業や会員みなさまの活動について、私自身知らないことが多々あるなということです。今期は、書評も含めてそういった活動をできるだけ紹介していきたいと思います。書評はみなさまから随時受け付けますし、会員みなさまに知ってほしい活動などございましたら、ぜひお寄せください。

(ニュースレター担当幹事 堤千絵)

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読申込などは下記へご連絡ください。

〒710-0046 岡山県倉敷市中央2-20-1

岡山大学 資源植物科学研究所

日本植物分類学会 池田 啓 (会計幹事)

Phone: 086-434-1238, Fax: 086-434-1249

E-mail: ike@okayama-u.ac.jp

会費：一般会員 5,000円, 学生会員 3,000円, 団体会員 8,000円

郵便振替口座番号：00120-9-41247

加入者名：日本植物分類学会

※ニュースレターに掲載された記事の著作権は日本植物分類学会が管理いたします。

平成 29 (2017) 年 2 月 20 日印刷
平成 29 (2017) 年 2 月 25 日発行

編集兼 茨城県つくば市天久保 4-1-1
発行人 国立科学博物館植物研究部
堤 千絵

発行所 茨城県つくば市天久保 4-1-1
国立科学博物館植物研究部

日本植物分類学会